

2006年(ワ)第6484号 謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王子雄 外39名

被告 日本国

2008年(ワ)第18382号 謝罪及び損害賠償請求事件

原告 呉 及義 ほか21名

被告 日本国

## 意見陳述書

2009年6月15日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国四川省成都市青羊区陝西街266号3棟2单元4号

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 呉 及義

### 1、はじめに

私は呉及義と申します。1939年2月16日生まれで現在70歳です。今、中国四川省成都市に住んでいます。

1939年6月11日、日本軍が成都で行った無差別爆撃で、父呉榮芬(当時32歳)が殺され、自宅も父が経営していた旅館も破壊・焼失してしまいました。

新中国になった後、私は1957年、成都工学院(現在の四川大学)に入学し、1966年に同大学を卒業したあと、重慶で働き、1974年に成都に戻って成都鉸山用ランプ製造工場で働き、1995年に定年退職を迎えました。

私自身は、1939年6月の日本軍の成都爆撃の時、私は生まれてまだ数ヶ月経ったばかりでしたが、爆撃の話は母や姉から聞かされていました。

母は、父を無くした後、私を含む3人の子供をかかえて、大変苦労しました。母は、爆撃によって夫を突然しかも無残に殺されたうえ、築き上げてきた財産も一切合財失い、幼い子供を3人も抱えて本当にたいへんな生活を強いられてきた。母親として子供達に満足に食べさせてやれず勉強もなかなかさせてやれなかったつらさは本当に言葉に出来ないものだったろうと思います。

### 2、爆撃以前の私の家族

最初に成都爆撃が始まる前の私の家族について紹介します。

私の祖父は成都出身で、当時シルクの商売をしていました。その後シルク商

売から得た資金をもとに旅館を経営することになりました。

祖父と祖母の間には2人の息子がいました。私の父呉栄芬とその弟呉栄芳です。私の父は祖父の跡を継いで旅館を経営するようになり、父の弟はシルクの仕事を引き継ぎました。

1928年、父呉栄軒は母何淑良と結婚し、1929年に長女呉徳琮が生まれ（別紙写真1、2）、1932年に次女呉智琮（別紙写真2）が生まれました。1934年に三女が生まれましたが、数ヶ月で亡くなりました。1937年に四女呉美琮、1939年に長男である私が生まれました。

しかし、長女呉徳琮は1937年8歳の時、病気で亡くなりました。

こうして、爆撃前の我が家は、二番目の祖母（当時50歳）と父呉栄芬（当時32歳）、母何淑良（1906年8月7日生まれ、当時33歳）、二番目の姉呉智琮（1932年8月28日生まれ、当時6歳）、四番目の姉呉美琮（1937年1月12日生まれ、当時2歳）と私呉及義（当時4ヶ月未満）計6人の家族でした。

当時の我が家はリビングルームと二つの寝室、それに厨房と内庭のある100平方メートルほどの広さの建物で、成都市交通路にありました。

父が経営していた旅館「長庄旅館」は交通路の自宅から約200、300メートル離れた西東大街（塩市口付近）にありました。旅館には十数間の部屋があり、総面積は400平方メートルほどでした。客は主に成都で商売をやっている外地の商人たちで、通年旅館に泊まっていた方も多かったです。父は2、3人のコックさん、会計係と2人の使用人を雇って仕事を手伝ってもらっていました。

旅館経営は日々繁盛し、我家の生活も良くなり比較的裕福な生活を送っていました。

### 3、日本軍の成都爆撃で父が殺された

1938年以降、重慶が日本軍機に爆撃されたという情報が成都に度々聞こえてきて成都市民も成都でも重慶と同じ様な爆撃が始まることを予測していました。

1938年11月、日本軍が成都に対して2回の爆撃を行ったとき、母は警報がなるたびに身重の身体で2人の娘を連れて郊外に避難していました。1939年に私が生まれた後、父は成都市内がまた日本軍に狙われるかもしれないと考え、東郊外（現在の牛市口）に小屋を借りて私たち母と子供たち3人をそこに疎開させました。

1939年6月11日の夕方、成都市内は防空警報が鳴り響きました。疎開先でこの警報と空を飛ぶ日本軍機の音を聞いて、母は子供らを連れて竹の林に身を隠しました。

私たちは林の中から成都城内の方を臨んでみました。母の話によれば日本軍機が成都城内に爆弾を投下すると一瞬で空は赤色に染まり、鼓膜を破るかの様な音が絶えず聞こえてきました。その様子を見た母は驚いて、「たいへんだ！城内の自宅と旅館が爆撃されたかも知れない！」と叫びました。

母から幾度も聞かされたのですが、爆撃後の成都城内は見えないほどの悲惨な状況だったそうです。

人々は泣きながら爆撃を受けた中心地の東大街やその周辺に集まってきました。被害の中心地のあたりは家屋は跡形もなく、至るところ黒い煙が高く立ちのぼり、燃え続けている家や瓦礫の山になった家ばかりでした。目の前を血だらけになった負傷者や体がばらばらになった遺体が担架で運ばれていきました。街は戒厳状態で通行出来なくなりましたが、自宅の様子を見に行こうとする人はとても多かったです。

母はようやく自分達の旅館の前に着いたのですが、もはやその建物は通りに面した店舗部分が半壊しか残っておらず、旅館の後ろの部分はすべて瓦礫と化していました。廃墟の中に数人の遺体も見えました。

母は警察から負傷者は病院に運ばれたと聞き、すぐに父を病院まで探しに行きました。病院の隅々にまで重度の火傷を負った人や手足が爆弾で切断された人、顔面が変形した人たちが苦痛にうめきながら寝転がっていました。

母は、各病院を回って注意して一人一人確認していましたが、結局父の姿は見つけれませんでした。仕方がなく、母は再び旅館に戻り、何か手がかりがないかと思い、廃墟の中を探してみました。そして黒焦げになった数人の遺体を見つけ出し、その中の1人の遺体から1つの懐中時計（別紙写真3、4）を発見しました。

母は棒でその懐中時計を取り出して、父のものだと確信しました。父だと思われる遺体はすでに1メートルまで縮まり、両腕と膝の下の部分は焼けて灰になっていました。頭部は黒くなっていて顔ははっきり見分けることが出来ませんでした。母は父の遺体に伏せて父の名前を叫びながらその場で泣き崩れました。

我が家が営んでいた旅館の周辺が爆撃されたと聞いて駆けつけてきた叔父は

母を慰めて、母はようやく悲しみを抑えました。爆撃を受けて財産をすべて失ったため、父の遺体を埋葬する費用もなく母は叔父と二人で父の遺体を白い布で包んで成都近郊の十二橋にある無縁墓地に埋葬しました。私たち3姉弟は誰も父の最後の様子を見ることはできませんでした。

父が亡くなった後、父の友人から爆撃当日のことを聞かえてもらう機会がありました。その日、警報が鳴った後、彼は一緒に避難しようと父を誘いに来たのですが、旅館に宿泊している数人の客が自分たちも避難したいと言うので、父は使用人によくお客さんの面倒を見るようにとお願いするため、再び旅館に戻ったのでした。

#### 4、母親が受けた爆撃による被害

母は、爆撃で殺された父の遺体の悲惨な姿を目にしたことに長く苦しめられていました。戦争が終わって、新中国になって以降も、母は無念の死をとげた父のことが頭から離れず、ご飯を食べず一人で泣いたりしていました。また母は夢に中にも父が現れて胸が締め付けられるような体験を何度もしたと話していました。

このように母は、日本軍の成都爆撃で夫を殺されたことがどうしても納得できず、父のことが頭から離れることはなかったようです。それほど父の死は母を精神的に、また肉体的に苦しめ続けていました。

母は、父が爆撃で死んだ後、ずっと結婚しないで子供を育ててくれましたが、その間中も特に精神的には常に苦しみ続けた毎日でした。母は1994年に亡くなりましたが、死ぬまで心に突き刺さった戦争の傷跡を消すことは出来なかったのです。

#### 5、父が亡くなった後の私たち3姉弟の生活

大爆撃によって、父を亡くし、旅館と自宅も失った母と3人の子供はこれからどうやって生きていくかの目途が立っていない絶望的な状況に陥り母は私たちを連れて煙袋巷17号にある劉氏祖母の家に身を寄せました。

劉氏祖母の家は店舗用の部屋が一間、寝室が一間あり祖父が亡くなってから祖母は一人暮らしをしていて、店舗を人に貸して得た収入で生計を立てていました。

そこで母は針や糸などを販売したり、家政婦をしたり、人力車をやったり、靴底を手作りしたり、布ベルトを遠いところの市場に持って行って売ったりし

てかろうじて一家の生活を維持しました。しかし、母と祖母のわずかの収入で私たち3人の子供を養うのはなかなか難しいことで、叔母はいつも私たちがひもじい思いをしているだろうからと言って食糧票をくれたのです。私たちはそれを持って慈善会に行って米をもらって食べていました。

私たちは長い間一日三食をお腹いっぱい食べられない、厳しい生活を送ってきました。成都解放後、1950年から私の母は生産組に参加し手作業の仕事をするようになり、我々の生活状況は少しずつ改善できるようになりました。

生活難で、私たち兄弟は学校に通うことは不可能でした。母はやむを得ず叔父に助けを求めました。叔父はシルク商売をしていましたが、子供が4人もいたので、私たち3人全員を援助することは難しく、次女呉智琼一人の学費を支援してくれました。

その後から呉智琼は叔父の家で生活するようになり、叔父の家の家事を手伝いながら成都市牛市口の小学校に通いました。呉智琼は小学校卒業の1年前、1学年飛び越えて済川中学校に進学するくらい成績が優秀で、中学校を卒業した後は、公費で捺染（なっせん）専門学校に入り、1950年に卒業、その後看護師として空軍部隊に入りました。彼女は部隊でもらった数元の生活費を母に送りました。その後、北京に移転し小児科の医者として北京部隊の医院で定年退職まで働きました。

姉の呉美琼は生活が困難であったために学校に通うことが出来ず、毎日祖母と家で留守番をし、母から少しずつ文字の読み書きを教えてもらって覚える程度でした。一日三食をちゃんと食べることが出来なかったために、姉呉美琼は体が弱くて貧血で倒れることが常にありました。ある日、姉呉美琼はどうしても飢餓に耐えられなくて祖母からお金をもらって餅を買いに行きましたが、店の前で意識を失って倒れたということもあります。

1948年、11歳の姉呉美琼は母と叔父の援助でようやく光華街にある小学校に入ることができました。

在学期間、彼女は何回も学年を飛び越えて進級し、1950年までわずか一年半で小学校を卒業しました。

1949年成都が解放された後、姉呉美琼は母と一緒に一年間靴作りをしていました。

1951年、姉呉美琼は奨学金で華美女子中学校に入り、1954年に卒業しました。その後、再び公費で成都医学校に進学し、1957年に卒業した後、四川省長寿の

水力発電所の職工医院に就職し、1966年に歯医者として部隊病院に入りました。

成都爆撃後の1946年、私が7歳の時、母は貯めたお金で、私を小天竺街にある弟維小学に通わせてくれました。しかし、学費を払う度、親戚の家を回って助けを求めた母のことが記憶に残っています。どうしても学費を払えない時、やむを得ず休学届けを出すしかありませんでした。学費を準備できるまでは数週間の時間がかかりました。

学校の休み期間、私は母と一緒に物売り行ったりしました。わずか8、9歳の私はタバコやお菓子を売ったりする等のことをすべて経験しました。つらい経験はそれだけではなく父がいない私は子供の時、肝玉が小さくて、周りの同世代の子供に苛められても、言い返しすること、堂々と立ち向かうことができず、我慢し続けることしかできませんでした。

#### 6、対日民間賠償請求は認められなければならない

1974年、私は35歳でしたが、仕事の勤務地が重慶から再び成都に戻ることになりました。私の家族は母と同居して生活するようになりました。ですから母は気持ちの上では安定した毎日が送れるようになったはずです。

しかし、こと日本のことになると非常に感情的でした。例えば、旧正月に、2人の姉が家族を連れて成都にやって来たような時は、昔話になり母は父の話しをしてくれました。当然、父を殺した日本軍の空爆の話しになりますが、そんな時の話しは、いつも「日本鬼子(リ・ベンクイズ)」の連発となります。

母は、日本政府も日本の一般の人々も特に区別していませんでした。私は、たしかに日本軍に対する憎しみの点では全く母と同じ気持ちなのですが、戦争に反対し平和のために運動している日本人民を支持してきました。国交回復を実現し、中日友好を達成することは大事なことだと考えてきました。

ところで母は、何度も、父が死んだとき身に着けていた懐中時計を手にししながら、私に言って聞かせました。その話というのは、「お前はお父さんを知らないけど、この時計の重みが父さんの恨みだからね。いつも時計を手にとって歴史を忘れないようにしなさい」というものでした。

その母の話は私にとって大切なものでしたから、父が殺されたことを無駄にしないために何が出来るのかを長い間考えてきました。退職した頃、私が到達した結論は、「日本政府は成都爆撃の被害者に何もしていないじゃないか。このままでは正義は実現されていない。一刻も早く日本政府は被害者に謝罪すべきだ。」というものでした。

こういう考えは、中国の強制連行や従軍慰安婦や731部隊などの被害者が裁判を起こすことに刺激を受けて、だんだん明確になってきました。そう思っているうちに、重慶の爆撃被害者が先に裁判を起こしました。それから成都でも爆撃被害者による対日個人訴訟の運動があることを知ったとき、私はまよることなく原告になろうと考えました。

ですから、私が起こしたこの裁判には、母の残した遺言である歴史を忘れるな、という大事なメッセージが含まれています。このことを裁判官には是非とも判ってほしいと思います。

次に紹介するのは、当時私の親戚の劉東園さんが父の死を悼んで書いてくれた詩です。

#### 追悼文

6.11の夕方、サイレンが鳴り始め、鉄鳥（日本軍機）の轟々と鳴り響く音と爆弾の炸裂音が立った。愛する叔父様が倒壊した家屋の下敷きとなり、火柱に包まれ、こういうことが起こるのは誰も想像できないであろう！ 永遠の別れである！ 今後、叔父様がいないかわいそうな子供、今後、前途有望な青年は消えた、あなたの指導をしてもらえなく、私を導いてくれる人がいなくなる。涙が叔父様の遺影にこぼれた。叔父様の魂はどこをさまよっているか？ 故郷ははるかに遠くなった。今後、夢の中でしか会えなくなる。一生で築き上げた財産はすべて灰燼と化し、すべての努力は徒労に帰した！ お子（吳及義）はまもなく1歳、いま少し待てば墓参りができるようになる。叔父様、あの世で安らかに眠ってください。静寂な夜半、月は長い空を照らして、秋の虫の鳴き声はあなたの魂を呼んでいるようである。叔父様に可愛がられた私は悲しい気持ちで遺影の前で謹んで哀悼の意を表す。

（民国）二九・九・一四

（劉）東園 作

最後に、日本の裁判官が、公平に審理され、私たち成都爆撃の被害者が求めている「謝罪と賠償」の請求を認められるように強く求めて、私の意見を終わります。

以上



何淑良（母） 劉冰如（母方祖母） 吳榮芬（父）  
吳德琮（姊）



吳榮芬（父） 何淑良（母） 伯母  
吳德琮（一番目の姉） 吳智琮（二番目の姉）



吳美琮（四番目の姉） 吳德琮（二番目の姉） 本人 吳及義  
母方祖母 何淑良（母）



本人 工場の同僚（黄祖文）と工場正門前で



1985年攝影



望之二辰為昏，驟枕底暮春。  
天空翠，驚夢驚鳥，生呼，銀鳥  
葬之生魄，碎骨生相，我親愛  
的芳父，投了何處，何處  
依託，被吞土壁，火九燃燒。  
狂何相得斗，送名，永別了。  
送令，離了你孤苦零丁的兒女。  
送令，辱了子志，底底莫豪，送  
令，重映亦着你的指導，疎了  
亦的奇情。流珠兒滴上你的去  
照要你盡了，你的魂靈兒漂上  
何處，故鄉遠，送今空想  
渺茫，孤苦夢遠，一生積集  
白火冤抱莫歸，心力小受勞！  
你的魂兒已離二架，年，可以立  
你的收基祭掃，你底在何處  
矣。趁夜上深宵，月上懸空  
照，在靈那，心在把魂招，你可  
知你愛護的魂兒，今朝，帶  
着彼岸的心，向四心影，悲常了！  
二九六一四，夜，東園作。







